

大阪湾初記録のウミドジョウ

木村祐貴¹・木下亮平²

Author & Article Info

¹ 地方独立行政法人大阪府立環境農林水産総合研究所水産技術センター（岬町）

KimuraY@o-suishi.in.arena.ne.jp (corresponding author)

² 泉佐野漁業協同組合（泉佐野市）

Received 28 May 2025

Revised 30 May 2025

Accepted 31 May 2025

Published 02 June 2025

DOI 10.34583/ichthy.56.0_1

Yuki Kimura and Ryohei Kinoshita. 2025. First record of *Sirembo imberbis* (Ophidiidae) from Osaka Bay, Japan. Ichthy, Natural History of Fishes of Japan, 56: 1–3.

Abstract

A specimen of *Sirembo imberbis* (Temminck and Schlegel, 1846) was collected from Osaka Bay, Japan, in 2024. In Japanese waters, this species has previously been recorded from the Pacific coast from the Boso Peninsula to Shibushi Bay, the coasts of the Sea of Japan and East China Sea from Niigata to Kagoshima prefectures and Iyo-nada. Thus, the present specimen, described herein detail, represents the first record of *S. imberbis* from Osaka Bay.

ウミドジョウ属魚類 *Sirembo* は日本国内からウミドジョウ *S. imberbis* (Temminck and Schlegel, 1846) のみが知られており、水深 30–200 m の泥底や砂泥底域に生息している（中坊・甲斐，2013）。本種は千葉県外房から志布志湾の太平洋沿岸、新潟県から鹿児島県の日本海・東シナ海沿岸および伊予灘から報告がある（多々良ほか，1965；南西海区水産研究所，1987；中坊・甲斐，2013；清水，2013；村瀬ほか，2021；岩坪ほか，2022）。

2024 年 11 月 12 日に大阪湾で操業していた小型底びき網漁船によってウミドジョウ 1 個体が採集された。本標本は本種の大阪湾初記録となるため、ここに報告する。

材料と方法

計数・計測方法は Nielsen et al. (2014) にしたがった。標本の作製と登録は本村（2009）にしたがった。体各部の計測はデジタルノギスを用いて 0.1 mm の精度で行った。標準体長（standard length）は体長または SL と表記した。本

報告で使用した標本は大阪市立自然史博物館（OMNH-P）に登録、保管されている。なお、本標本は左体側腹部が破損しているため、右体側で撮影、計測を行った。

Sirembo imberbis (Temminck and Schlegel, 1846)

ウミドジョウ

(Fig. 1)

標本 OMNH-P53572, 体長 150.8 mm, 大阪府泉南郡岬町沖、水深 42 m, 小型底びき網（石げた網）、2024 年 11 月 12 日、木下亮平。

記載 計数形質および各部の体長に対する割合を Table 1 に示す。体は側扁し、やや長い。体高は肛門付近で最大。体背縁はほぼ直線的。体腹縁は頭部から肛門にかけてわずかに下降し、肛門から尾柄にかけて緩やかに上昇する。頭部はやや丸みを帯び、吻は短い。上顎は下顎よりわずかに前方に突出する。眼は円形、眼径は両眼間隔よりわずかに大きい。

鼻孔は 2 対。前鼻孔、後鼻孔は近接し、眼の前縁前方に位置する。側線は背鰭第 4 軟条直下付近で体背縁に最も近付いた後、緩やかに下降し、体背縁と平行に走る。肛門は背鰭第 25 軟条基部直下付近に位置する。胸鰭起部は背鰭第 1 軟条基部よりもやや前方に位置する。腹鰭は糸状に伸長し、基部は上顎後端よりもやや後方位置する。腹鰭の後端は胸鰭基部を越える。背鰭は胸鰭基部直上のやや後方から始まり、臀鰭は肛門の直後から始まる。背鰭と臀鰭の基底はきわめて長く、それぞれ尾鰭と鰭膜で繋がる。尾鰭は伸長する。鱗は円鱗。背鰭起部における側線上方横列鱗数は 9。

色彩 生鮮時（Fig. 1）—頭部と体の地色は銀白色で、吻端から尾鰭後端までの体背縁は黄褐色。腹側にかけて徐々に白みを帯びる。背鰭基底には 17 個の不明瞭な黄褐色斑が並び、一部の斑紋は背鰭鰭膜に達する。側線に沿うように 9 個の黄褐色斑が並ぶがその形状や大きさは様々。吻端から肛門直上にかけて不連続の薄い黄褐色の縦帯がみられる。虹彩は薄い黄色。背鰭は基底付近ではやや白みが



Fig. 1. Fresh specimen of *Sirembo imberbis* from Osaka Bay. OMNH-P53572, 150.8 mm SL (left-right inverted).

かった半透明。背鰭第1軟条から第46軟条では背鰭縁部にかけて3個の楕円形の黒色斑がある。背鰭第47軟条以降は背鰭縁部にかけて黒色を呈し、背鰭縁辺部の外縁はわずかに白みがかかる。胸鰭は半透明で、基底部上端に小黒点がみられる。腹鰭は白色。臀鰭は基底付近ではやや白みがあった半透明で、臀鰭縁部にかけて黒色を呈し、臀鰭縁辺部の外縁白色。尾鰭は薄い黒色。

分布 ウミドジョウは日本のほか朝鮮半島東岸南部、台湾、中国南シナ海沿岸、海南島、ベトナム西岸、タイランド湾、フィリピン諸島、バリ海、アラフラ海、オーストラリア北岸・東岸・西岸に分布している（中坊・甲斐, 2013; Nielsen et al., 2014）。日本国内では千葉県外房から志布志湾太平洋沿岸、新潟県から鹿児島県の日本海・東シナ

海沿岸および伊予灘から報告がある（多々良ほか, 1965；南西海区水産研究所, 1987；中坊・甲斐, 2013；清水, 2013；村瀬ほか, 2021；岩坪ほか, 2022）。本研究により、新たに大阪湾から記録された。

備考 記載標本は、背鰭に3個の黒色斑があること、臀鰭起部が背鰭第26軟条直下にあること、前鰓蓋骨に棘がないこと、胸鰭軟条数が23であることなどの特徴が中坊・甲斐（2013）および Nielsen et al. (2014) が示した *Sirembo imberbis* の標徴と一致したため、本種に同定された。

多々良ほか（1965）および南西海区水産研究所（1987）は、瀬戸内海とその周辺海域で確認された魚種をリスト化し、ウミドジョウが瀬戸内海で確認されたことを報告しているが、具体的には豊後水道、紀伊水道および瀬戸内海の周辺海域である徳島外域と土佐湾からの記録であり、瀬戸内海の内海域（周防灘、伊予灘、安芸灘、広島湾、燧灘、備讃瀬戸、播磨灘、大阪湾）では確認されていない。瀬戸内海の内海域の生物相を網羅的に整理した稲葉（1988）でも本種は確認されなかったが、その後、清水（2013）は瀬戸内海の愛媛県海域（伊予灘）から標本に基づく初記録を報告している。大阪湾を含む瀬戸内海で採集された魚類標本目録（波戸岡・花崎, 2017）や大阪湾で実施した小型底びき網調査で得られた魚類を整理した木村ほか（2022）でも本種の記録はなく、本標本が本種の大阪湾からの初めての記録である。

本標本はイヌノシタ *Cynoglossus robustus* Günther 1873 やクマエビ *Penaeus semisulcatus* De Haan, 1844 を狙って操業していた小型底びき網によって採集された。採集された地点は過去にウミドジョウの記録がある紀伊水道に近い大阪湾南部海域であることや、同海域で長年操業している第2著者が初めて目撃したことを考慮すると、太平洋側から偶発的に大阪湾に出現したと考えるのが妥当であろう。不破（1976）は志布志湾の小型底びき網漁船の漁獲物を調査し、詳しい水深データは示されていないものの水深60 m

Table 1. Counts and measurements of *Sirembo imberbis* from Osaka Bay, Japan.

	OMNH-P53572
Standard length (mm; SL)	150.8
Counts	
Dorsal fin rays	97
Pectoral fin rays	23
Anal fin rays	70
Pelvic fin rays	2
Caudal fin rays	9
Total gill rakers	13
Measurements (% of SL)	
Head length	20.8
Snout length	4.2
Depth origin anal fin	13.9
Upper jaw length	10.4
Posterior height of maxilla	4.6
Diameter of orbit	5.4
Interorbital width	5.1
Postorbital length	10.3
Prepelvic length	9.9
Preanal length	44.0
Predorsal length	22.7
Base of pelvic fin to anal fin origin	33.8
Pectoral fin length	11.5
Pelvic fin length	12.7

以浅の砂底あるいは泥底で本種を確認している。井手ほか(2003)は、須崎湾の水深 30 m から 45 m において小型機船底びき網が採集した本種の標本を 16 個体確認し、当該海域では普通種であると述べている。須崎湾において本種が採集された水深帯の底質も砂底あるいは泥底であり(浜田ほか, 1973), 本研究の記載標本も粘土質の泥底海域から採集されていることから(横山・佐野, 2015), 本種は砂底から泥底を生息環境として利用していると考えられるが、それ以外の生態学的知見は極めて乏しい。今後も継続した生態研究が求められる。

謝 辞

本研究を行うにあたり、泉佐野漁業協同組合の木下武仁氏には標本の採集にご尽力を賜った。大阪市立自然史博物館の松井彰子氏には標本収蔵に際して便宜を図っていただいた。ここに感謝の意を表する。

引用文献

- 不破 茂. 1976. 志布志湾の小型底びき網漁業について 漁場及び漁獲物. 鹿児島大学水産学部紀要, 25: 125–135.
- 浜田康行・堀内泰男・邑岡和昭・市原利行・山本 順・鎮西正道・堀見雄三. 1973. 高知県下の主要内湾における底質調査. 高知県公害防止センター年報, 1: 38–50.
- 波戸岡清峰・花崎勝司. 2017. 瀬戸内海産魚類標本目録. 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録, 48: 1–204.
- 井出幸子・町田吉彦・遠藤広光. 2003. 小型底曳き漁船による高知県須崎市沖の底生性魚類. 高知大学海洋生物教育研究センター研究報告, 22: 1–35,

- 稲葉明彦(編). 1988. 増補改訂瀬戸内海の生物相 II. 広島大学理学部附属臨海実験所, 向島. 475 pp.
- 岩坪洗樹・伊東正英・山田守彦・本村浩之(編). 2022. 薩摩半島沿岸の魚類. 鹿児島水圏生物博物館, 枕崎・鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. 329 pp.
- 木村祐貴・鍋島靖信・大美博昭・佐野雅基. 2022. 1990 年代および 20210 年代に大阪湾底びき網モニタリング調査で採集された魚類. 地域自然史と保全, 44: 61–70.
- 本村浩之. 2009. 魚類標本の作製と管理マニュアル. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. 70 pp.
- 村瀬敦宣・緒方悠輝也・山崎裕太・三木涼平・和田正昭・瀬能 宏(編). 2021. 新・門川の魚図鑑: ひむかの海の魚たち. 宮崎大学農学部附属フィールド科学教育研究センター延岡フィールド, 延岡. 358 pp.
- 中坊徹次・甲斐嘉晃. 2013. アシロ科, pp. 514–524. 中坊徹次(編) 日本産魚類検索 全種の同定. 第 3 版. 東海大学出版会, 秦野.
- 南西海区水産研究所. 1987. 瀬戸内海と周辺域における採集物の種組成 昭和 32–35 年 中型二そうびき網による試験操業. 南西海区水産研究所調査報告, 4: 1–154.
- Nielsen, J.G., W. Schwarzhans and F. Uiblein. 2014. Review of the Indo-West Pacific ophidiid genera *Sirembo* and *Spottobrotula* (Ophidiiformes, Ophidiidae), with description of three new species. Marine Biology Research, 11: 113–134.
- 清水孝昭. 2013. 愛媛県瀬戸内海域より初記録の魚類. 南予生物, 17: 14–35.
- 多々良薫・北森良之介・永田樹三・水戸 敏・林 知夫・工藤晋二. 1965. 瀬戸内海漁業振興調査結果による瀬戸内海および隣接大陸棚における魚類目録付・軟体動物目録. 内海区水産研究所刊行物 C 輯, 3: 77–123.
- 横山 寿・佐野雅基. 2015. 大阪湾, 2013 年の底層環境—主成分分析による水域区分と既往調査との比較—. 日本水産学会誌, 81: 68–80.